

## 一般演題C-1

### 当院における児童虐待防止対策 ～周産期からの取り組み～

中村 哲生<sup>1)</sup>、笠井 真理<sup>1)</sup>、田原 三枝<sup>1)</sup>、英 久仁子<sup>1)2)</sup>、康 文豪<sup>1)2)</sup>、川又 攻<sup>2)</sup>、大西 聡<sup>2)</sup>、江口佳孝<sup>2)</sup>、東 孝<sup>2)</sup>、大江 公明<sup>2)</sup>、三崎 美保<sup>2)</sup>、辻井 直子<sup>2)</sup>、藤屋 礼子<sup>2)</sup>、西山 誠<sup>2)</sup>、田中 京子<sup>2)</sup>、高下 裕子<sup>2)</sup>、中辻 潔<sup>2)</sup>、前垣 雅弘<sup>2)</sup>、竹岡 由美子<sup>2)</sup>、金 太章<sup>2)</sup>、舟本 仁一<sup>3)</sup>

大阪市立住吉市民病院 産婦人科<sup>1)</sup>、児童虐待防止委員会<sup>2)</sup>、病院長<sup>3)</sup>

当院では平成22年12月に児童虐待防止委員会を立ち上げ、児童虐待の早期発見と防止を目的として小児関連病棟用、小児関連外来用、新生児未熟児室用および妊産褥婦用のチェックシートを作成した。今回、妊産褥婦用シートにチェックがついた症例の背景や支援介入内容等を検討した。

平成23年度の分娩726件中チェックシートの提出があった症例は152例(20.9%)であった。平均年齢は29.7±7歳、既婚112例 未婚40例、初産婦71例 経産婦81例であった。チェック項目数は1つ;61例、2つ;47例、3つ;21例、4つ以上;23例であった。入院助産制度の利用者は45例、生活保護受給者は19例であった。要養育支援者情報提供票を提出した症例は86例あり、プライマリーシートの提出も16例見られた。

妊産褥婦用のチェックシートの利用により、周産期から特定妊婦をほぼ全例把握し必要に応じて地域関連機関への連携が可能となったと思われた。

## 一般演題C-2

被虐待児が転居するとき  
～圏域を越えた連携の必要性について～

毎原敏郎<sup>1)</sup>、井上美智子<sup>2)</sup>

兵庫県立塚口病院 小児科<sup>1)</sup>、MSW<sup>2)</sup>

被虐待児に対応するためには、医療機関内の Child Protection Team や地域の要保護児童対策地域協議会などによる多職種間の連携が必要であり、うまく機能すれば効果を挙げることができる。一方、被虐待児の家族が転居をする場合には、医療・保健・福祉の機関が必要に応じて転居先と連絡を取るようになるが、その圏域(特に都道府県)を越えると連携が不十分になるリスクがある。当院で経験した事例を元に、連携の問題点と今後の対策について検討し報告する。

## 一般演題C-3

### 舌喉頭矯正術による夜泣き改善と母子心中回避事例

山本伊佐夫<sup>1)</sup>、山西敏朗<sup>2)</sup>、中川貴美子<sup>1)</sup>、大平 寛<sup>1)</sup>、山田良広<sup>1)</sup>

神奈川歯科大学社会歯科学講座法医学分野<sup>1)</sup>、山西クリニック<sup>2)</sup>

オトガイ舌筋の一部を切除する舌喉頭矯正術(以下 CGL)により、前上方へ偏位していた喉頭は直立するため上気道の抵抗が減少し呼吸が改善し、いわゆる夜泣き、疳の虫などが解消する。乳児 CGL 前後の生活記録表および生体加速度計解析により、夜泣きと睡眠を検討した。術後は蹄泣時間、回数が有意に減少し、睡眠効率、中途覚醒時間が改善した。

【症例】「今から4ヶ月児と自宅7階から飛び降りるつもりだが、友人から舌の手術で夜泣きが治ったと聞き息子も治るならば」ということで来院した。出生時より夜泣き、啼泣が激しいため一日中抱っこであった。小児科を受診するも患児の個性だと言われた。母親は育児ノイローゼとなり数回患児を殴打。初診時、哺乳中 SpO<sub>2</sub>:91~94%、喉頭:前上方偏位。典型的重度舌癒着症のため、即日 CGL。術後、蹄泣、夜泣きが激減し熟睡。笑顔が増え始め児が可愛く思えた。その後自殺願望はなく現在は子育てを楽しんでいる。

## 一般演題C-4

将来の医療従事者への虐待に関する教育

岩原香織<sup>1, 2)</sup>、都築民幸<sup>1, 2)</sup>、松村桜子<sup>2, 3)</sup>、佐藤喜宣<sup>2, 1)</sup>

日本歯科大学生命歯学部歯科法医学センター<sup>1)</sup>、杏林大学医学部法医学教室<sup>2)</sup>、杏林大学保健学部看護科医療科学室<sup>3)</sup>

日本歯科大学では、平成5年度より法医学の講義に「虐待」を取り入れ、平成13年度には「虐待の歯科所見」も加え、講義を継続してきた。講義の評価ならびに学生の意識を知るためにアンケート調査を行い、他大学でも同様のアンケートが行われてきた。これら過去の調査と、教育評価の一つとも考えられる国家試験における虐待関連既出問題の分析研究等を振り返り、将来の医療従事者への虐待に関する教育について考察を加え、「連携」の必要性、重要性を再認識したため、報告する。

## 一般演題C-5

当院における性虐待被害事例の検討

～性暴力救援センター・大阪での取り組みを加えて～

楠本裕紀、加藤治子、中川美生、林永修、石田絵美、山柘誠一

阪南中央病院 産婦人科

当院は大阪府松原市にあり、内科・小児科・外科・整形外科などを有する地域の総合病院である。産婦人科では2010年4月に院内に開設された「性暴力救援センター・大阪」の診療部門を担い、以前にもまして性虐待被害児童の診療体制が整えられた。性虐待は身体的影響ばかりでなく、精神的影響が大きくまた長期に及ぶといわれている。今回7年間の性虐待事例をまとめ、被害の実態と医療の果たす役割について検討したので報告する。